

■ 一つの焦点は「ユーロ/ドルが重要な節目を上抜けるかどうか」

ドル/円については、やはり21年1月安値から22年10月高値までの上昇に対する50%押しの水準である127円台前半、先週16日につけた安値=127.22円あたりというのが、当面の下値サポートとして意識されやすくなっている。

先週は、18-19日に再び127円台を垣間見る場面があったものの、週末にかけては下値をグンと切り上げる格好に…。背景には、米連邦準備理事会（FRB）のウォーラー理事が20日に、次回の米連邦公開市場委員会（FOMC）における利上げ幅について「0.25%ポイントを希望する」と述べたことや、ダボス会議に臨んだ黒田日銀総裁が大規模緩和の継続方針について改めて念を押すような発言をしたことにあった。

これらは、ドル売り材料であると同時に円売り材料にもなるが、足元は円売りの流れの方がやや強い。既知のとおり、それは23日に日銀が5年物の「共通担保資金供給オペ（公開市場操作）」を実施したところ、1兆円の予定額に対して3兆1290億円の応札があったと伝わったことが大きい。

結果、円債金利は全体に低下傾向を強めており、1月17日に一時0.36%台まで上昇した5年物の日本国債の利回りは、足元で0.16%前後にまで大きく低下している。

むしろ、これは紛れもなく円売り材料。それに加えて、24日に発表された1月の米購買担当者景気指数（PMI）速報値が事前の市場予想を上回る結果となったことで、今度はドル



買いの動きが強まることとなり、24日にドル/円は一時131.12円処まで値を戻す動きとなった。

ところが、左図に見るとおり、そこは21日移動平均線（21日線）がガッチリと上値を押さえる格好となり、同線に押し戻される動きとなって以降は調整含みの展開を続けている。

なお、21日線とほぼ同じ水準には一目均衡表の週足「雲」上限も位置しており、その意味でも131円前後の水準は

当面の重要な節目としてどうしても意識される。仮に、同水準をクリアに上抜ける動きとなれば、次は200日移動平均線を意識した動きもあり得ると見ておきたい

そもそも、次回FOMCでの米利上げ幅が0.25%ポイントに縮小することは既に市場で織り込まれていると考えられ、当面のドルの下値は自ずと限られると見ることもできる。ただ、昨日はカナダ中銀が行っていた金融政策委員会の結果が公表され、その声明で次回以降の金利据え置きを示唆したことが市場にやや強めのインパクトをもたらした。

また、ここにきてユーロに強気の見方が増えてきていることも、ドルの弱気材料の一つとなり得る。既知のとおり、予想外の暖冬によって欧州における天然ガスの価格は大幅に低下しており、域内景気の先行きに対する見通しも徐々に明るさを増しつつある。

何より、ラガルド欧州中央銀行（ECB）総裁のタカ派姿勢がヤケに目立っており、市場では、ECBが2月も3月も0.50%ポイントの利上げを実施すると見る向きが増えている。結果、ユーロ/ドルは昨日で5日続伸となり、ついに一目均衡表の週足「雲」上限水準（現在は1.0930ドル処）に到達した。今後、この「雲」上限や1.10ドル処の大節目を明確に上抜けるような展開となれば、市場全体の顔つきも少々変わったものになってくる

と心得ておかねばなるまい。

（01月26日 10:00）